

保育専攻学生の社会人基礎力と施設保育実習後の自己評価の関連

Adult Competence and Self Assessment after Child Care Training in Students Studying Child Care

大日方 重 利
藤 重 育 子

はじめに

- I. 問題と目的
- II. 方法（対象・手続き・調査票）
- III. 結果と考察
- IV. まとめ

はじめに

近年における国の施策として、女性の労働能力を高く評価し、生涯を通じて働く女性を増やしていこうしている。その一環として子育て中の女性が就業を続けていけるために、乳幼児の保育の場を増やしていくことが急務であるが、親たちが安心して託児できる施設や専門の保育者養成制度を充実していくことが必要である。

関連して、保育の専門家である「保育士」の働く職場について世間では、保育所のみに限定して考えられている趣があるが、実際は保育所を含めてほとんどすべての児童福祉施設（乳児院、児童養護施設等々）には保育士が配置されている。

以上2つの事情だけを鑑みても、親による養育の（一時的）代行者を務める保育士について、十分かつ高い資質を持つ専門家としての養成の重要性が益々高まってきているといえる。因みに、近年幼児期からの心身の健やかな発達を目指す「スポーツ保育」の理論と実践も広まってきているが、その指導者が保育についての深い知識さらには保育士の資格も持つことが望ましいといえる。

本研究は、基本的にこのような理念に基づいている。

I. 問題と目的

上述のごとく資質の高い優秀な保育士を養成するにはどうしたらよいであろうか。近年の若者たちにおいては少子化の影響もあって、成長の過程において乳幼児に接する機会がほとんどない者が増えているといわれる。実際に、大学や専門学校の保育専攻課程に入学してくる学生たちに尋ねてみても、乳幼児に関心はあっても、直接接する機会を持たないままで入学してくる者が少なくない。

それ故、保育士養成カリキュラムにおいてはもとより保育実習が極めて重視されてきたが、近年はその意義や指導法について実証的な研究が進められるようになってきている。すなわち保育実習について事前・事後指導の内容はどうあるべきか、実習を体験した後に学生たちの資質・態度・関心にどのような変化が生じるか、保育士になるために必要な学生の基礎的資質についてなど多岐にわたっている。

例えば岡田(2008)は、保育実習について「生活に関する自己効力感と実習達成感の関連を見出し、実習で前向きに（幼児に対する）生活支援活動が行えるように事前指導をすることが学習効果である実習達成感の向上に繋がる」と主張した。これを受けて河野(2011)は、保育所以外の児童福祉

施設における保育実習の効果を測定するために、3因子18項目からなる「施設実習自己効力感尺度」を作成した。また山口(2007)は、実習前後における短大生の心的効果を検討し、「実習前と比較して実習後は『自己効力感』と『いきがい感』に有意差が認められることを確認したうえで、施設実習の経験が、学生の心的発達に影響を与えている」ことを明らかにしている。

ところで見てきたように保育士の職場は、保育所のみでなく各種の児童福祉施設にわたっている。保育所と違って各施設では、乳幼児を入所させ24時間の保育を行うことが多いので、施設実習では実習生たちは保育所以上に子ども達の日常生活に密接に関わり、生活を共にするという体験をすることになる。そのために実習生たちは、保育所での実習とは異なる刺激を受けて実習先より戻ることが多いと思われる。事実「入学時は3%であった施設保育士への就職希望が施設実習終了後、30%になったことから施設での体験実習の意義と効果が大きいものと考えられる」(多田内ら,2013)という報告も納得できよう。

また、保育実習後に学生自身に自身の振り返りや評価をさせて、実習の効果を検証しようとする研究も少なくない。例えば中原(2008)は、学生の自己評価と実習現場指導者による評価を比較検討し、「保育士養成期間の2年は資格取得のための2年間であると同時に、保育士としての自らの適性や人間観を育てていく過程でもある」ことに注目した。さらに石山ら(2010)は、「実習を経験した学生自らが自分の実践を振り返り、自己評価を行うという活動が、その後の学びや活動の動機づけに影響を与え、個人の資質を高めていくことに繋がる」ことを強調している。

以上保育実習の効果に関するいくつかの研究結果を垣間見てきたが、保育士として望まれる資質として専門的な知識や技能の習得はもちろんであるが、チームワークで働くことや自身で考える力など2006年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」に相当する諸能力も重視される必要がある。この社会人基礎力とは「一歩前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(さらに全部で12個の能力要素からなる)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために(社会人として)必要な基礎的な力」と定義されている。すなわち近年のグローバル化の進む社会において企業や若者を取り巻く環境変化に対して、従来言われてきた「基礎学力」と「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための能力としての「社会人基礎力」を意図的かつ積極的に育成していくことが提唱されているのである。

それ故当然のことであるが、保育専攻学生が将来働くであろう各種の保育現場においても、保育に関する専門知識・専門技能とは別に保育者間のチームワーク、自ら考えたり働き掛けていく主体性、コミュニケーションの能力などを欠かすことできない。しかしながら、保育士養成に関してこのような視点からの研究や検討は、これまで殆どなされてきていないようである。

そこで本研究においては、保育専攻学生たちにおける現在の「社会人基礎力」と、施設での保育実習後の自己評価の関連性をみることにより、保育士としての資質やその養成の在り方について、新しい視点から検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象

A短期大学子ども学科の2年次生157名が、2014年6月に地元の各種児童福祉施設にて9日間(宿泊型)と10日間(通園型)の施設保育実習に参加した。学生たちは1名~4名のグループに分けられて、児童養護施設、一時保護所(児童相談所)、障がい児・者施設、重症心身障がい児・者施設など全25施設に分かれて実習した。

それまで入学後の1年2か月の間に、大学における講義や実技指導を通して、保育の理論・知識や基礎的技能を習得させた。施設保育実習のねらいは、保育の実際的な考え方やより実践的・応用的技能を身に付けさせることである。

2. 調査手続き

施設保育実習が終了してから1週間後の大学における事後指導の際に、「社会人基礎力」と「実習に関わる自己評価」の調査を集団で実施した。

本調査に回答した学生数は全実習生157名中の132名（女子129名、男子3名）であった。

なお、「社会人基礎力」の調査は、保育実習が始まるまでの普段の自分について回答してもらい、「実習に関わる自己評価」の調査では、実習直前および実習期間中の実習に関わることがらについて回答を求められた。

3. 調査票

(1)「社会人基礎力」の調査票

経済産業省提唱の「社会人基礎力12項目」(表1)における12個の能力要素について、「5：非常にある(非常に当てはまる)」、「4：かなりある(かなり当てはまる)」、「3：少しある(少し当てはまる)」、「2：あまりない(あまり当てはまらない)」、「1：まったくない(まったく当てはまらない)」の5件法にて回答してもらう調査票を作成した。

表1 社会人基礎力12項目（経済産業省より引用）

【前に踏み出す力】	1 主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	2 働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例)「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	3 実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけではなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
【課題発見力】	4 課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	5 計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	6 創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
【チームで働く力】	7 発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	8 傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境づくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	9 柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	10 状況判断力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	11 規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	12 ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

(2)「自己評価」の調査票

民秋 (2011) が作成した『実習生のための自己評価チェックリスト』(榊萌文書林発行) における一部の項目を抜粋して作成した。民秋のもともとのリストは、実習前、実習中、実習後それぞれの時期における自己評価ができるようになっており、17種別計186項目からなっている。

本研究においては、その中から特に研究目的に関係のある項目として4種別計47項目が選択された。その内訳は、実習前の事柄(5項目)、実習全般(20項目)、実習日誌(18項目)、安全管理(4項目)である。また各項目の内容は表2に示すとおりである。それぞれの項目に対して「4:はい」、「3:かなり」、「2:少し」、「1:いいえ」の4件法で回答してもらう。

表2 自己評価47項目 (民秋, 2011より抜粋)

【実習前の事柄】	1	1日も休まずに実習することができましたか	【実習日誌】	1	その日の子どもの様子を思い起こしながら実習日誌を記録しましたか
	2	勤務時間の始まりまでに十分余裕を持って通勤しましたか		2	日誌の中に5領域だけでなく養護面の観察・記録を含めて記載しましたか
	3	実習園への提出物の期限を厳守しましたか		3	その日のあなた自身の実習目標を日誌に記録しましたか
	4	実習するのにふさわしい身だしなみに努めましたか		4	その日のあなたの実習目標を振り返りながら「反省・評価」等の欄を記入しましたか
	5	保護者（保証人）など施設で会ったすべての人に明るく元気に挨拶することができましたか		5	保育者がどのように子どもに接しているか意識的に観察しようと思いましたか
【実習全般】	1	保育者（指導担当職員）から注意や指摘を受けたときには「はい」と素直に返事ができましたか	【実習日誌】	6	休息を必要とする子どもに、保育者がどのように対応していたかを意識的に観察しようと思えましたか
	2	保育者（指導担当職員）から注意や指摘を受けたときには受け入れるよう努力しましたか		7	遊びが展開するように、保育者がどのような声かけをしていたかを意識的に観察しようと思えましたか
	3	実習終了時間に「お先に失礼します。明日もよろしく願いいたします」と丁寧に挨拶できましたか		8	子ども（利用者）が自ら体を動かしてみたいと思うようにするための保育者の配慮を意識的に観察しましたか
	4	実習中、手洗いやうがいを意識的に行うなど、あなた自身の健康管理に努めましたか		9	子ども（利用者）同士の人間関係がよくなるようにするための保育者の配慮を意識的に観察しましたか
	5	実習後に睡眠時間を確保するために、時間を有効に使用しましたか		10	子ども（利用者）が自発的に活動できるようにするための保育者による環境の構成を意識的に観察しましたか
	6	実習施設の保育方針を理解して、実習に取り組むことができましたか		11	子ども（利用者）が思ったことを表現できるような保育者の配慮を記録できましたか
	7	子ども（利用者）に常に明るく、元気に声をかけるよう努めましたか		12	あなた自身と子ども（利用者）のやりとりを具体的に実習日誌に記録するよう努めましたか
	8	子ども（利用者）一人ひとりの名前を覚えるよう努力しましたか		13	保育の中で、保育者が子どもに受容的に接することの大切さに気付きましたか
	9	親しみをもってもらえるよう自己紹介をしましたか		14	子ども（利用者）がルール（きまり）を守ることができるようにするための保育者の配慮を記録できましたか
	10	手遊びや絵本を読むなど、できるだけ多くの機会をとらえて子ども（利用者）と親しくなるよう努めましたか		15	子ども（利用者）のその日の様子の違いなど意識して観察するよう努めましたか
	11	1日の保育の流れを把握して、自分からすすんで保育者の手伝いや掃除など行いましたか		16	実習日誌に記述された保育者（指導員）のコメントを翌日以降の実習に生かすことができましたか
	12	保育者に指示された仕事を最後まで責任をもってやり遂げましたか		17	保育者（指導員）に添削してもらった誤字脱字や不適切な表現を自分自身で日誌に修正しましたか
	13	保育者に対して、保育に関わることがらについて、報告・連絡・相談するように努めましたか		18	あなたが書いた実習日誌は、誰が読んでも内容が正しく理解できるものになっていると思いますか
	14	自分の意見をもって保育者と話し合えましたか	【安全管理】	1	事故やけがが発生しないように子ども（利用者）から目を離さないようにしていましたか
	15	子ども（利用者）一人ひとりの特徴を理解するため、保育者に質問するよう努めましたか		2	子ども（利用者）がけがをしないよう、はっきりと声をかけましたか
	16	子ども（利用者）一人ひとりの発達段階について、保育者に質問するよう努めましたか		3	子ども（利用者）がけがをする可能性のある活動をしていたときは即座に止めに入りましたか
	17	保育課程について、保育者に質問するなどして、理解しましたか		4	子ども（利用者）がすすんで手洗いやうがいなどをしよう働きかけをしましたか
	18	指導計画について積極的に保育者に質問するなどして理解しましたか			
	19	保育のねらいと内容との関係について保育者に質問するよう努めましたか			
	20	保育者の行動の背後にある意図について質問し理解するよう努めましたか			

Ⅲ. 結果と考察

まず調査結果の分析に当たり、対象学科の学生はほとんどが女子であり、男子は数パーセント（実数にして10名未満）である。また上述のごとく本調査の回答者についても全132名中男子は3名に過ぎなかった。したがって、結果の分析は男女別を問わないで実施されたが、ほとんど100%近くが女子学生である（男子は1.9%）。

次に分析の内容であるが、「社会人基礎力」と実習に関わる「自己評価」それぞれについて見てから、最後にその両者の関連について検討する。

1. 社会人基礎力について

全12項目の平均値は3.35であった。また各項目における平均値については表3-1に示すとおりである。

この全体的平均（3.35）からみて、それをかなり下回った項目（能力要素）として3.0以下の数値を示しているのは創造力、発信力、ストレスコントロールの3項目である。このうちの前2者はそれぞれ、近年各企業等の採用において特に重視されている想像性（既存の考えにとらわれない斬新な発想力）及びコミュニケーション能力に対応するものであろう。これら各能力は企業活動に限らず福祉や教育などの分野においても重要な資質であろうから、保育士養成において特に実習指導では今後重視すべき観点である。

また、これら3者のうちで特に最も低い数値を示した「ストレスコントロール力」の低さに関しても、近年の若者たちの特徴といえる。因みに「5：非常にある(非常に当てはまる)」と回答した学生は5名のみであった。清水ら(2012)は、ストレスが高い学生は、「抑圧」や「発散」といった望ましくないストレスコーピング方略を用いていることを明らかにしており、保育実習に参加するまでに学生が自身の不安やストレスに気づき、より望ましい対処法を身につけるよう具体的に日常的な指導をしていくことの重要性を強調している。

いずれにしても、社会人基礎力は個人の幼少時から時間をかけて育成されるものであり、一朝一夕の短期間に身に付くものではないので、幼児期からの長い目で教育の在り方を考えていくこともなされなければならない問題である。

一方全体的平均と比べて比較的高い数値を示しているのは、傾聴力、柔軟性、規律性の3つの能力要素である。これら3者はいずれも「チームで働く力」というカテゴリーに属しており、学生たちは日常生活において社会的な秩序を守り、お互いの意見を取り入れて助け合って行動する能力は十分に身に付いているといえる。このことは表3-2に示すように、社会人基礎力として大きく3つの能力（カテゴリー）に分けた場合において、上記の「チームで働く力」が最も高い値であることから明言してよいであろう。

しかしながら、表3-1で見たように「チームで働く力」は6つの能力要素からなっているが、3つの高い値とは逆に2つの低い値（発信力とストレスコントロール力）が混在していることにも注目する必要がある。このことに関連する先行研究として藤ら（2008）のものがあり、「保育者養成学生は、物事に対してもポジティブな考え方で、明るい学生が多いということが分かったが、その一方で、学生自ら関わるといふ行動をとれるようにすることに課題がある」と指摘されている。この指摘は、上述の本結果にも対応するといえる。

表3-1 社会人基礎力(12個の能力要素)の平均値

【前に踏み出す力 アクション】	1 主体性	物事に進んで取り組む力	3.58
	2 働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	3.14
	3 実行力	目的を設定し確実に行動する力	3.36
【課題発見力 シンキング】	4 課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	3.03
	5 計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	3.08
	6 創造力	新しい価値を生み出す力	2.98
【チームで働く力 チームワーク】	7 発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	2.98
	8 傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	3.83
	9 柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	3.77
	10 状況判断力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	3.53
	11 規律性	社会のルールや人との約束を守る力	4.05
	12 ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	2.89

表3-2 社会人基礎力(3つの能力)の平均値

【前に踏み出す力 アクション】	1 主体性	3.36
	2 働きかけ力	
	3 実行力	
【課題発見力 シンキング】	4 課題発見力	3.02
	5 計画力	
	6 創造力	
【チームで働く力 チームワーク】	7 発信力	3.51
	8 傾聴力	
	9 柔軟性	
	10 状況判断力	
	11 規律性	
	12 ストレスコントロール力	

さらに経済産業省の調査(2009)によれば、一般の企業への学生の就職意識に関して「企業が『学生に求める能力要素』と、学生が『企業で求められていると考える能力要素』には大きな差異が見られる」と分析されている。また、「企業が学生に対し『主体性』『粘り強さ』『コミュニケーション能力』といった『社会人基礎力』に類する内面的な能力要素の不足を感じている一方、学生はそれらの能力要素への意識は低く、『自分は既に身につけている』と考える傾向が見られる」とも述べられている。このような分析に関連して、保育専攻学生の実習指導に関して中原(2008)は、「実際に実習後の実習先からの評価や学生自身の自己評価を比較検討した場合に日常の学習と実践の結果に差が生じていた」と報告している。これらのことから、保育士の養成のために今後は、学生や養成機関の立場からだけでなく、卒業後に就職する現場から求められる資質・能力がどんなものかを、特に保育実習に先立って学生に理解させ、少しでも身に付けるように取り組むことを指導することも重要なことであるといえよう。

2. 保育実習終了後の自己評価について

保育実習に関する自己評価について、全47項目の得点全体の平均値と、4種類の種別それぞれの平均値を表4に示す。各質問に対する最高点は4点であるから、いずれの平均値も3.5以上であることから、自己評価は全体的に高いといえる。しかし各得点を比較すれば、「実習前の事柄」に関して最も高く、次に高いのは「安全管理」についてであるが、「実習全般」つまり実習そのものへの取り組みや「実習日誌」の取り組みについてはやや低いことが分かる。初めての实習に当たっての実習生たちの戸惑いが窺われる。

表4 自己評価の平均値

全体	実習前の事柄	実習全般	実習日誌	安全管理
3.58	3.84	3.53	3.53	3.70

次に、47項目それぞれにおける平均値を表5に示す。この表において網掛けの数値は高い値(3.9以上)を、斜字の数値は逆に低い値(3.0以下)を示している。

表5 自己評価47項目の平均値

【実習前の事柄】	1	1日も休まずに実習することができましたか	3.94
	2	勤務時間の始まりまでに十分余裕を持って通勤しましたか	3.80
	3	実習園への提出物の期限を厳守しましたか	3.93
	4	実習するのにふさわしい身だしなみに努めましたか	3.95
	5	保護者（保証人）など施設で会ったすべての人に明るく元気に挨拶することができましたか	3.71
【実習全般】	1	保育者（指導担当職員）から注意や指摘を受けたときには「はい」と素直に返事ができましたか	3.93
	2	保育者（指導担当職員）から注意や指摘を受けたときには受け入れるよう努力しましたか	3.94
	3	実習終了時間に「お先に失礼します。明日もよろしく願いいたします」と丁寧に挨拶できましたか	3.74
	4	実習中、手洗いやうがいを意識的に行うなど、あなた自身の健康管理に努めましたか	3.55
	5	実習後に睡眠時間を確保するために、時間を有効に使いましたか	3.59
	6	実習施設の保育方針を理解して、実習に取り組むことができましたか	3.49
	7	子ども（利用者）に常に明るく、元気に声をかけるよう努めましたか	3.77
	8	子ども（利用者）一人ひとりの名前を覚えるよう努力しましたか	3.89
	9	親しみをもってもらえるよう自己紹介をしましたか	3.38
	10	手遊びや絵本を読むなど、できるだけ多くの機会をとらえて子ども（利用者）と親しくなるよう努めましたか	3.36
	11	1日の保育の流れを把握して、自分からすすんで保育者の手伝いや掃除など行いましたか	3.76
	12	保育者に指示された仕事を最後まで責任をもってやり遂げましたか	3.82
	13	保育者に対して、保育に関わることがらについて、報告・連絡・相談するように努めましたか	3.73
	14	自分の意見をもって保育者と話し合えましたか	3.39
	15	子ども（利用者）一人ひとりの特徴を理解するため、保育者に質問するよう努めましたか	3.54
	16	子ども（利用者）一人ひとりの発達段階について、保育者に質問するよう努めましたか	3.36
	17	保育課程について、保育者に質問するなどして、理解しましたか	3.23
	18	指導計画について積極的に保育者に質問するなどして理解しましたか	2.92
	19	保育のねらいと内容との関係について保育者に質問するよう努めましたか	2.85
	20	保育者の行動の背後にある意図について質問し理解するよう努めましたか	3.23
【実習日誌】	1	その日の子どもの様子を思い起こしながら実習日誌を記録しましたか	3.90
	2	日誌の中に5領域だけでなく養護面の観察・記録を含めて記載しましたか	2.96
	3	その日のあなた自身の実習目標を日誌に記録しましたか	3.85
	4	その日のあなたの実習目標を振り返りながら「反省・評価」等の欄を記入しましたか	3.69
	5	保育者がどのように子どもに接しているか意識的に観察しようとしたか	3.85
	6	休息を必要とする子どもに、保育者がどのように対応していたかを意識的に観察しようとしたか	3.43
	7	遊びが展開するように、保育者がどのような声かけをしていたかを意識的に観察しようとしたか	3.52
	8	子ども（利用者）が自ら体を動かしてみたいと思うようにするための保育者の配慮を意識的に観察しましたか	3.40
	9	子ども（利用者）同士の人間関係がよくなるようにするための保育者の配慮を意識的に観察しましたか	3.56
	10	子ども（利用者）が自発的に活動できるようにするための保育者による環境の構成を意識的に観察しましたか	3.55
	11	子ども（利用者）が思ったことを表現できるよう保育者の配慮を記録できましたか	3.34
	12	あなた自身と子ども（利用者）のやりとりを具体的に実習日誌に記録するよう努めましたか	3.55
	13	保育の中で、保育者が子どもに受容的に接することの大切さに気づきましたか	3.72
	14	子ども（利用者）がルール（きまり）を守ることができるようになるための保育者の配慮を記録できましたか	3.63
	15	子ども（利用者）のその日の様子の違いなど意識して観察するよう努めましたか	3.71
	16	実習日誌に記述された保育者（指導員）のコメントを翌日以降の実習に生かすことができましたか	3.39
	17	保育者（指導員）に添削してもらった誤字脱字や不適切な表現を自分自身で日誌に修正しましたか	3.35
	18	あなたが書いた実習日誌は、誰が読んでも内容が正しく理解できるものになっていると思いますか	2.97
【安全管理】	1	事故やけがが発生しないように子ども（利用者）から目を離さないようにしていましたか	3.80
	2	子ども（利用者）がけがをしないよう、はっきりと声をかけましたか	3.67
	3	子ども（利用者）がけがをする可能性のある活動をしていたときは即座に止めに入りましたか	3.60
	4	子ども（利用者）がすすんで手洗いやうがいなどをするよう働きかけをしましたか	3.65

※高い値を網掛け、低い値を斜字で示す

まず保育実習での取組み全体に関する「実習全般」の 카테고리についてみると、2つの項目「1. 保育者（指導担当職員）から注意や指摘を受けたときには「はい」と素直に返事ができましたか」と「2. 保育者（指導担当職員）から注意や指摘を受けたときには受け入れるよう努力しましたか」では特に高い値が示された。それに対して次の2項目「18. 指導計画について積極的に保育者に質問するなどして理解しましたか」と「19. 保育のねらいと内容との関係について保育者に質問するよう努めましたか」では値が低かった。これらの傾向から見えてくることは、学生たちが実習を受け入れる姿勢は十分に認められるが、積極的に質問したりして保育の実践を身に付けようという意欲に欠けるといえよう。土谷(2007)も、保育実習に関する学生の意欲と取り組み方について、「何でも自分から積極的に行動せず言われたことをそつなくこなすという受け身である」と指摘している。同様に田中ら(2008)も、「何に対する積極性か」というと、子ども達だけでなく先生方、保護者に対してであり、人と関わることの積極性が必要であることを常に感じる。自分ではできていると思っ
ていても、第三者から見るとできていない」と述べ、実習中における現場の教職員との積極的な関
わりの重要性を強調している。さらに上述のごとく藤ら(2008)も、保育実習において「様々なコミュ
ニケーションを学生自身が体験できるような場を設定していくことも視野に入れて指導していかな
ければならない」と主張している。見てきたように本研究結果から、同様な課題が明確に浮き彫り
になったといえよう。

次に「実習日誌」に関して、「1. その日の子どもの様子を思い起こしながら実習日誌を記録しま
したか」と「18. あなたが書いた実習日誌は、誰が読んでも内容が正しく理解できるものになっ
ていると思いますか」という2項目に着目すると、前者は高い値を示したが、後者は低い値を示し
ていた。このことから、実習の記録は熱心に行ったが、記述内容についてはあまり自信を持ってい
ないという姿が浮かんでくる。実習記録は、実習生個人の学習のためだけでなく、その現場に関わ
る全ての保育者（他の実習生たちも含めて）が共有して、明日の保育実践に役立つようなものであ
ることが望ましい。また中原(2007)は、実習記録による指導に関して「子どもの対応の重要な鍵を
握る記録の取り方であったり、社会におかれた児童福祉施設の役割などについても意欲を持って実
習を通じて学べるように援助する必要がある」と述べている。したがって、実習記録の意義やその取
組み方について、より充実した指導を展開していくことが望まれる。

最後に「安全管理」については、4つのカテゴリーのうち「実習前の事柄」に次いで2番目に高
い値が示された。これ結果から、実習生たちは子どもたちの安全や健康のためにはかなり配慮して
いたと評価できよう。但し、実際に予期せぬ災害や事故などが発生した場合の対処について、現場
職員の一人としてどのように行動したらよいかについて実地に学ぶために、できれば実習期間中に
各施設において“避難誘導訓練”なども体験できるようにすることが望ましい。

3. 社会人基礎力と自己評価の関連

社会人基礎力の合計得点について実習生全員（132名）の中央値は39点であった（図1参照）。こ
の値は平均の44にも近いものであるので、中央値の39点以下を社会人基礎力低群(66名)、40点以上
を社会人基礎力高群(66名)として折半し、自己評価得点の平均値の違いを比較した。その結果を表
6に示す。

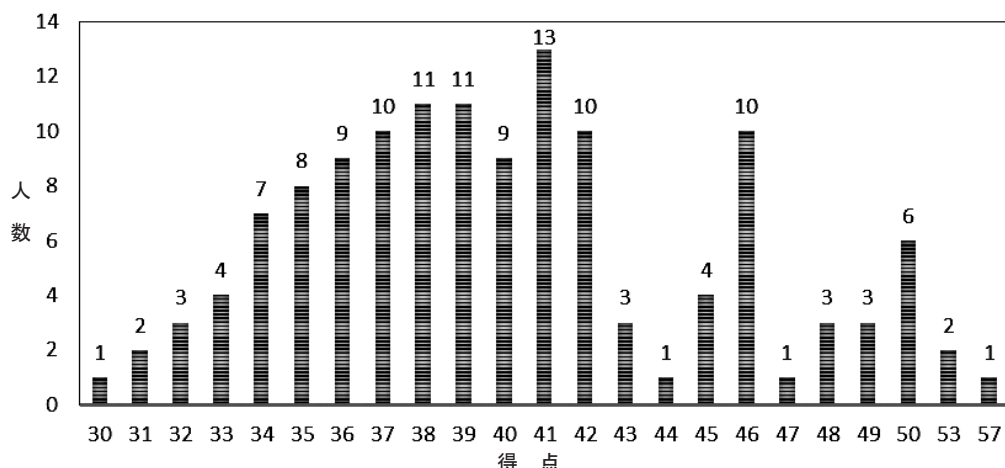


図1 社会人基礎力の合計点の分布

表6 社会人基礎力と自己評価の関連（平均値）

社会人基礎力		全体	実習前の事柄	実習全般	実習日誌	安全管理
	低群 (36.1)	3.53	3.84	3.47	3.48	3.70
	高群 (44.4)	3.64	3.85	3.61	3.59	3.71
群間差の検定 (t 値)		0.969	0.116	1.972 米	1.134	0.326 米 p < 0.05

この結果によれば、自己評価に関して全体得点と2つの種別得点（実習全般と実習日誌）については僅かではあるが、社会人基礎力高群は社会人基礎力低群よりも高い得点を示している。特に自己評価の「実習全般」においては、社会人基礎力高群の得点は社会人基礎力低群よりも片側検定5%の水準で優位に高かった。すなわち、一般的に社会人基礎力の高い群は低い群よりも実習に関わる自己評価が高いという結果が得られた。

「実習全般」に関する各項目は、保育の専門性全般の育成を図るものであるが、上述のごとく社会人基礎力の分析結果から考えると、本研究においては実習生たちの「チームで働く力」の強さが特に自己評価の高さに関わっているといえる。

いずれにしても、本研究の予想のごとく社会人基礎力は保育実習の取り組みを高め、さらに保育士の資質を養うために有効な能力として位置づけられるといえよう。したがって、今後の保育士養成課程においては社会人基礎力も高めるようなカリキュラムを検討する必要があると考えられる。

IV. まとめ

本調査研究から今後の学生指導の課題が種々明らかとなった。まず、学生が考える保育現場でのスキルと現場が求めるスキルとのズレを学生自身に把握させるように指導することが挙げられる。次に、保育実習中に学生たちが現場指導者に積極的に質問したり、場面設定に応じたコミュニケー

ション能力を習得することができるように、保育者養成機関でのカリキュラムや実習事前指導の在り方を改善していくことである。また実習記録のつけ方や保育所のみならず各種児童福祉施設の社会的役割などを実習を通じて積極的に学べるような実習制度を考えていく必要もある。さらに保育士養成という枠にとらわれなくて、社会人基礎力を高めるべく日ごろからの様々な指導・訓練を継続していくことが重要である。

『文 献』

藤京子・木村たき子「大学生のEQとCB-Eの関連性—『施設実習事前指導』に活用するために—」『千葉敬愛短期大学紀要』第30巻、2008年、73～81ページ。

石山貴章・安部孝・田中誠「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題(2)—実習事後指導を通じた『自己評価』と『気づき』に関する分析から—」『九州ルーテル学院大学紀要visio』第40号、2010年、59～72ページ

河野清志「保育学生の施設実習に対する自己効力感尺度の作成について」『山陽学園短期大学紀要』第42巻、2011年、29～35ページ

中原大介「児童福祉施設実習における自己評価と実習先評価の比較検討」『大阪健康福祉短期大学紀要』第5号、2007年、111～120ページ

中原大介「これからの保育実習指導についての一考察—児童福祉施設実習(居住型)を中心に—」『大阪健康福祉短期大学紀要』第7号、2008年、185～194ページ

岡田恵子「保育科学生の施設実習における生活支援に関する自己効力感と実習達成感との関連—障害系施設と養護系施設との比較を通して—」『川崎医療短期大学紀要』第28号、2008年、65～70ページ

清水里美・吉島紀江・志澤康弘・藤本史「保育士養成課程における実習指導上の留意点—施設実習の事前指導における教育内容の検討—」『平安女学院大学研究年報』第13号、2012年、19～28ページ

多田内幸子・重永茂「施設実習に関する本学幼児教育学科学生の意識調査」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第36巻、2013年、55～61ページ

田中千恵・鶴宏史「はじめての実習における保育援助についてⅡ—保育所実習と施設実習との比較を通して—」『神戸親和女子大学児童教育学研究』第27巻、2008年、40～49ページ

土谷由美子「保育実習に関する意欲と現状について—学生のアンケートを中心に—」『中国学園大学紀要』第6号、2007年、167～171ページ

山口直範「養護施設実習における短大生の心的発達効果」『岡山学院大学紀要』第30号、2007年、79～82ページ

民秋言『実習生のための自己評価チェックリスト』(株)萌文書林、2011年

経済産業省 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>

経済産業省「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実現に関する調査」2009年
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/201006daigakuseinosyakaijinkannohaakutonintido.pdf>